

エースの存在意義

ゼミでの2年間は私のこれまでの人生にとって一番濃密で、息をつく暇もなく過ぎ去った時間でした。そんな最高の2年間の思い出を振り返ってみると、常に首藤ゼミの仲間の姿がありました。ゼミに入った頃は右も左もわからず、ことあるごとに先生や先輩からご指摘のお言葉をいただく日々でした。それでも先輩たちは手を差し伸べ続けてくれました。私はそんな先輩の姿に憧れてばかりの日々でした。気が付くと楽しい日々は過ぎ去り、3年最後のゲストゼミの時期になっていました。それまでゼミではふざけてばかりいた僕でしたが、私を育ててくれた先輩の背中を追いかけるために「エース」になることを宣言しました。

しかし、私には、歴代エースのように突出したバイタリティがある訳でもなければ、仲間からの絶大な信頼がある訳でもありませんでした。そんな私に何ができるのだろうと考えながらも、ただその偉大な背中を追いかけて模索する日々でした。そんな私を支えてくれたのは、間違いなくゼミの仲間たちでした。私は、「エース」という存在の役割を考えたときに、何か突き抜けたものがないといけないと思っていました。ですが、実際にはそんなことはありませんでした。むしろ必要だったのは、自分の能力に関することよりも、仲間と積極的に関わり、知ろうとする姿勢でした。一番プレゼンが上手い必要もなければ、一番勉強ができる必要もありません。仲間と対話し、理解し、頼ることでゼミの空気をより良くすることができますのです。私にとっての「エース」とは、誰よりも優れた超人ではなく、誰よりも仲間のために自分は何ができるかを考え、とにかく行動に移すことができる人です。私もまだまだできていないことだらけです。時には「自分はそういうキャラではないからいいや」と思ってしまうこともあります。しかし、それを乗り越え行動に移す数をどれだけ増やせるかが「真のエース」になれるか否かの基準になります。

胸を張って言うようなことではありませんが、卒業を迎えるこのタイミングでも、まだまだ成長しきったとは思っていません。ですが、そんな私の背中を追って「エース」を目指してくれている後輩がいます。今も手探りでどうすればいいか迷いながら模索していることでしょう。完璧な人間でなくていい。仲間との関わりだけは絶やすことなく走り抜けてください。首藤ゼミは、仲間という関係を越えて、ファミリーと呼べる存在です。そんなファミリーのために自分には何ができるのか。それを常に問い続ければ、自分なりのエースが見えてくると思います。エースの在り方に正解はありません。困ったときは大切なファミリーを頼ってみてください。私にとっては想像以上に頼もしい存在でした。このメッセージを読んでいるあなたにとってのファミリーも、そんな素敵な存在になることを心から願っています。

2026年3月15日

首藤ゼミ3代目エース

能美真樹